

リンドウ栽培で発生しやすい薬害の症状と発生経過

福島県農業総合センター 作物園芸部花き科

1 部門名

花き - リンドウ - 生理障害

2 担当者

矢島 豊・宗方宏之

3 要旨

リンドウ栽培で用いられる薬剤の誤った使用方法や事故による薬害について、その予防や事後の的確な診断を目的として症状と発生経過を明らかにした。

- (1) ペンディメタリン乳剤(除草剤)による葉身の黄化症状(写真 1):規定の散布方法(リンドウ株を含めた全面土壤散布)では、正しい散布時期である萌芽前の散布では症状が全く発生せず、萌芽後の展葉期の散布で発生した。
- (2) グルホシネット液剤(除草剤)による組織の枯死症状(写真 2):ドリフトを想定した散布による薬液付着の約2~3日後以降に症状が視認された。なお、植物体内での移行性はないため、薬液の付着部位以外に症状は発生しなかった。
- (3) TPN 水和剤(殺菌剤)による花弁の脱色症状(写真 3):花蕾着色期の薬剤散布により発生し、開花が近い蕾ほど重症化した。花弁が折り重なる先端部や縦溝の部分に発生しやすい傾向があった。



写真1 ペンディメタリン乳剤による
葉身の黄化症状
(4月19日、展葉期散布10日後)



写真2 グルホシネット液剤による
組織の枯死症状
(5月27日、薬液付着3日後)



写真3 TPN水和剤による花弁の
脱色症状
(8月22日、花蕾着色期散布6日後)

4 成果を得た課題名

- (1) 研究期間 平成23年度～24年度
- (2) 研究課題名 福島の顔となるリンドウの高収益を実現する安定生産技術の確立
- (3) 参考となる成果の区分 (指導参考)

5 主な参考文献・資料

- (1) 平成23年度～24年度センター試験成績概要